

いまを描くこと

鈴江俊郎

山崎彬『メロメロたち』。選評会でも語られたが、戦場の扱い、戦場での人物の描写は、これが作家のタッチだと割り切れるのか疑問に感じるほど、幼い。若い書き手の想像力がその程度なのだと批判されても仕方ないのかもしれない。けれど私は、若者なりに考え、感じる戦争の予感があったのだ、と受け取った。自分の創作する人物・環境の仮想空間の中で、舞台いっぱい、脳内いっぱいに行った思考実験がこの長さなのだ、と。私にはとても個人的な記録だと思えた。

個人的には好みでないが、非日常っぽさを気取って安っぽくすごんだ人物たちの荒れたセリフの中に、素直な感情が吐露される言葉が混じると、これは意外と照れずに聞こえる。自然な筆致の中なら聞いてられないような臭い単純素朴なストレートが、この荒れ球の中では生きてくる。「人生はかわいい。めっちゃかわいい。愛なんてあーしにはわからへん。あーしの銃弾は愛やったかもしらん。けどそれが誰かにとってはエゴで、でも、あーしには愛やった。」など。

不思議なト書きがいくつもある。「ふりかけは世界中の目玉と戦う」。もちろん別のことば、別の整った日本語に置き換えようとすればできるのだろうが、そういう労力をよしとしない、ということか。いや、この言葉でないといけない、選択したくない、他の選択に労力をさきたくない、と圧倒するような気分がここにあるのだろう。終盤現れる長い「……」の応酬も、この芝居の中では印象の強い効果があるだろう。葛藤する、ってことを平凡な程度で済ませたくない意地のようなものを感じる。もちろん、日本語は発明してはいけない。書き手は、与えられた言語のルール中で表現を工夫するほかない。野球の腕前はルールの範囲内で競わないと意味がないのと同じだ。私の好みから行くと、成熟は簡明さに向かうもので、いたずらに新奇を競う気配は忌避したい。しかし新しい表現を目指せばぎりぎりの「発明」に近い言葉遣いにまで踏み込むことがある。この作品では、その点についてもきわどい境界付近にあって、危ういものを感じる。

植松厚太郎『午前3時59分』。うつ病者の内面と状況の客観描写のような記述。低劣な人間味の乏しい人物群像。いじめ、ろくな思い出のない故郷、普通の思いやりとも出会えないろくでもない都会。この国で、実際に、ある程度の数の人たちが体験している現実だと感じる。

救いのない最後の場面が、私には娯楽性を否定している思い切りを感じられて、心地よい。世間に否定され傷つけられ救いを見つけられず、孤独から逃れられない者たちは、他者に感謝する必要もないし、ただただ復讐を望むのみだろう。その復讐が新聞紙でただただ、という辻斬りが、かわいらしい。爽快感が少しある。しかし、世界はかわらず、人間関係も、この救われない人物もなにか変わるわけでもない。世界は誰も救えない、誰も

救ってはくれない、期待してはいけない、というメッセージを正直に発している印象。読後に、嘘でない、素朴に率直に語る人の話を聞いた、傾聴した、という印象が私には残った。

しかし、あまりにも事例報告、匿名化した事例報告のように一般化された特徴ばかり目立つ人物たちではある。そのため、飛距離が短い印象はある。もっと固有名詞を。具体的な特徴を。その人物にしかない詳細を、と求めたくなる。すると飛距離は伸びるのに、と。

また、アフォーリズムに近いような記述が特に後半、たて続けにあって、結局言いたいことは余すことなく語ってしまうつまらなさ。そこも惜しいところだ。

他の候補作品にも、現在を敏感に生きている者の悲鳴や笑いが、生傷の印象そのままに提示されていて、私には刺激が強かった。この国は、この世界は、どこまでいくのだろう。そこで戯曲は、どう対峙できるのだろう。考えはまだまとまらない。